

第1章 戦場

シベリアでの捕虜生活

人に話すことのできなかつたシベリアの捕虜生活

中村 博さんのお話から
なかむら ひろし

○砲兵 大砲を使って攻

撃する兵隊の種類。

昭和二十(一九四五)年六月二十日、私は満十九歳のときに旭川で入隊しました。法律が改正になって徴兵検査が一年早くなったのです。即入隊したので、訓練の期間はありませんでした。一週間くらい旭川にいただけで、すぐに樺太とソ連の国境付近の上敷香に転属になりました。私は砲兵といって大砲を撃つ兵隊となりました。

八月九日だったと思いますが、突然、ソ連の兵隊が国境を突破して攻めてきたのです。私たちは軍隊ですから応戦しなければなりません。しかし大砲はあっても弾がないのです。しかも、弾を撃ったら自己爆発するような不完全な大砲なのです。そこで、本部のある豊原まで、約四百キロを歩いて逃げました。

八月十五日に日本は無条件降伏をしたはずなのですが、ソ連は相手が武器も持たず抵抗もしないのに戦争を続けて、八月二十一日に戦争終結の宣言をしました。その後、私たちは豊原で捕虜になったのです。戦闘はほとんどせず、ただ逃げていただけでした。

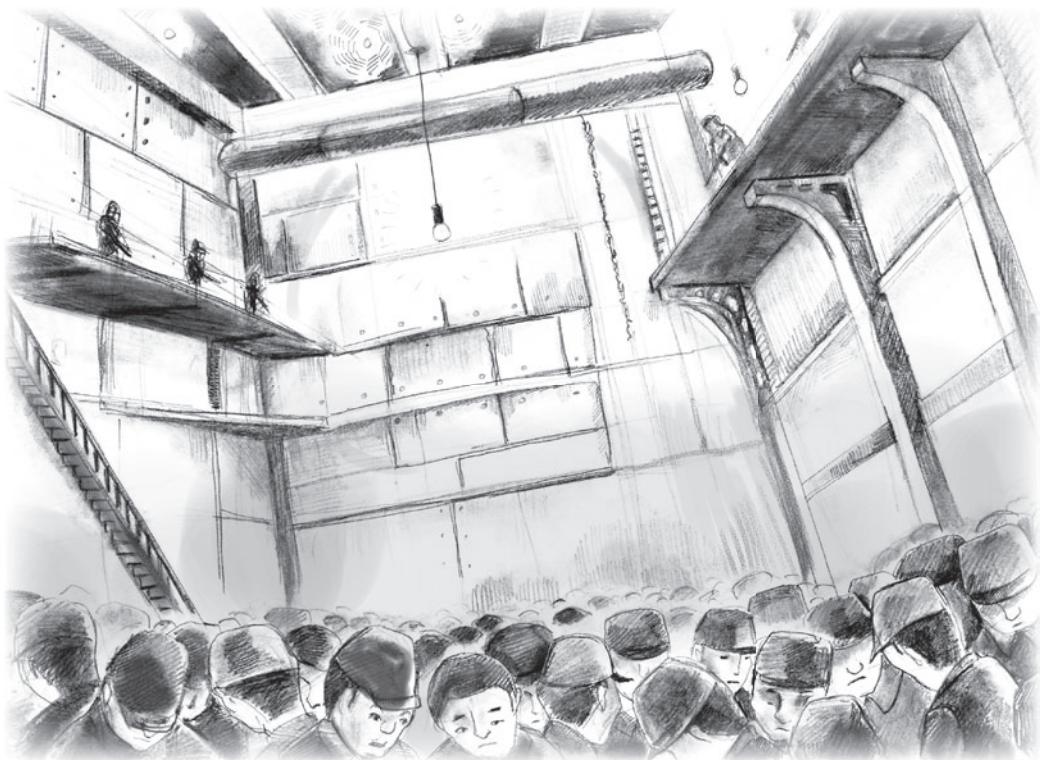
樺太の西海岸の真岡から、日本に帰るぞとだまされて貨物船に乗せられて、対岸のソフガワニに運ばれました。船には座る余地がなく、船底に立ちっぱなしです。上からはソ連兵が機関銃を持って、逃げないように狙っています。船は真岡から南へ向かい、おそらく金沢ぐらいまでは行ったと思うのですが、くるつと向きを変えて北へ向かいました。北といえばシベリアしかないのですから。このときは一番ひどかったです。三日ぐらい立ったまま船に乗っていたのです。ソフガワニに着くと、貨車で北の方に行きました。乗っていたのは一日、二日でしょうか。そ

して線路の終わりまで行って、降りたところが収容所でした。それから鉄道工事をさせられたのです。

鉄道工事は、線路の端まで貨車が来ると呼ばれて、みんなでて出して砂利を降ろして、線路の先に敷くのです。そこへ別の部隊がレールを敷いたり、枕木を置いたりして、線路ができていくのです。貨車が来たら、夜中に寝ていても引っ張り出されました。

あるとき、私の同年兵が、夜遅く真っ暗な中で砂利を降ろしていると、突然、貨車が動き出したのです。彼は足をひかれてしまいました。すぐにみんなで引っ張り出しましたが、足はぐちゃぐちゃでした。宿舎に連れていきましたが、医療の設備も何もありません。元衛生兵が二人いて、薪を切るノコギリを持ってきて、木を切るときのように向こうとこちらで引いたり押ししたりして足を切り落としたのです。麻酔はありませんので、すぐに気絶してしまうのです。でも、半年したら化膿し

人に話すことのできなかつたシベリアの捕虜生活



貨物船に寄せられた捕虜

イメージ図

○歩哨^{ほしやう} 兵營・陣地の要所に立って警戒・監視の任にあたること。また、その兵のこと。

○壊血病^{かいけつびやう} ビタミンCの欠乏によって起こる病症。貧血、衰弱、齒肉・皮膚等から出血することもある。

○南京虫^{なんきんむし} とこじらみ。人などから血を吸い、激しいかゆみと痛みをおこさせる。

○内務人民委員部 人民

てきて、その上をまた切ったのです。たしか、二回くらい切ったのではないかと思えます。そのうちソ連の歩哨^{ほしやう}が来て、どこかに連れていきました。彼は、結局、船に乗せられて日本に帰り、あちこちの陸軍病院に入っていたようです。三年後、私が日本に帰ったころに陸軍病院から退院しましたが、そのときはもう足の付け根から切断していました。

食べ物は黒パンだけでした。しかもたばこの箱をちよつと厚目にしたくらいのもので、朝昼晩で一つずつです。昼は働きに行くので、朝、昼の分も一緒にくれるのですが、腹が減っているからすぐに食べてしまうのです。そうすると、夜の分しかないのです。

当然、野菜はありません。ビタミンCが不足して壊血病^{かいけつびやう}になりました。初めは、齒ぐきがはれて、血が出ます。そのうち、体中のあちこちから出血します。すると、足も痛いし、血も出るので、寝台の階段を上がっていくことができません。ですから床で寝ていました。壊血病^{かいけつびやう}は半年、一年と経つとそのぐらいひどくなるのです。ところが知恵のある人がいましたね。松葉をとってきて、みんなで、がじがじと食べたのです。すると、不思議なことに壊血病^{かいけつびやう}はさっぱりと治ってしまいました。松葉など食べられるものではないけれど、命がけですからね。

そのうち、私はどうにも体が動かなくて鉄道工事を休んだのです。そして、私は入院させられました。病院は、一段ベッドが並んでいて清潔^{せいけつ}で、シラミも南京虫^{なんきんむし}もいないし、天国でした。食事は収容所とほとんど同じで少なかったのですが、働かない分、体力もつきます。

三カ月くらいいたら、だんだん肉がついてきたのでしよう。退院しろと言われました。そして、病院の中の雑役^{ざつえき}を命じられました。仕事はほとんど捕虜^{ほりよ}の死体の処理^{しより}で、三年近くやりました。

死体の処理は、冬は、亡くなった人を裸にして病院の横に置くのです。すると、ソ連の囚人^{しゅうじん}が死体を積んで縛^{しば}ってどこかへ持っていきました。私たちの管轄は内務人民委員部でしたが、ソ

委員部は、捕虜收容所（ラーゲリ）および労働移住、国家保安、労農民警察、国境および国内警備、火災予防を担当。後に内務省となる。

ビエト軍の管轄になると方法が変わりました。解剖して死因を確認するのです。しかし、医者でもないのに何もできず、それでも規則なので形だけ解剖しました。そして、翌日穴を掘って埋めます。それを私たち雑役が二人ずつ交代で行うのです。土も凍っていて金棒でいくら掘っても掘れません。何十センチまで掘って入れると決められていて、それをしないと食事も当たらないので一生懸命掘りました。しかし、少し穴を掘って、とれた土を体にきつとかぶせて、いかにも埋めたような顔をして報告しても、向こうも適当だから、よし終わりということ帰っていただくのです。

私は、昭和二十（一九四五）年の九月にシベリアに行って三年後の昭和二十三（一九四八）年九月に、ナホトカから船に乗って舞鶴に帰りました。ですから、私の戦争の経験というのは、戦闘というよりも捕虜の経験、しかもほとんどが死体の処理の経験です。特に自分で一番つらかったのが、死体の取り扱いの事です。あのシベリアの凍った中で、少ししか土を掘らずにごまかしたことは本当に悔やまれます。何とか、もう少し深く埋めてやれなかったかと悔やまれます。戦争のみじめさだけは、このような話から多少なりとも感じてもらえればと思います。二度とこんなことがないように、本当に願っています。

DATA

平成23年度南区平和事業
聞き取り
・平成23年11月22日
・南区役所



中村 博(なかむら・ひろし)さん

・大正15(1926)年生まれ
・札幌市南区在住

人に話すことのできなかったシベリアの捕虜生活